

# 未来への伝承

第197回

## 土浦城の来歴を物語る『土浦城記』

皆さんは、「土浦のシンボル」といえば、真っ先に何が思い浮かびますか。秋の全国花火競技大会、霞ヶ浦の帆曳船、夏の蓮田の風景などとともに、土浦城を思い浮かべる方もいらっしゃるのではないでしょうか。

現在、土浦城跡は亀城公園として整備され、市民の憩いの場となっています。公園内には、明暦2（1656）年に改修されたと伝わる櫓門（茨城県指定文化財／史跡第1号）が現存しており、江戸時代当時の土浦城の様子を現在に伝えています。

市民にとって身近な存在である土浦城ですが、その歴史に注目すると、築城年月日や築城者などははっきりとしておらず、まだまだ未解明な部分が多く残ります。そんな土浦城の来歴を伝える数少ない史料のひとつが、『土浦城記』です。

『土浦城記』は、17世紀後半に瀧泉寺（中央二丁目）の住職であった祐鏡（生没年不詳）が著しました。築城者をめぐる諸説の紹介にはじまり、江戸時代以前に城主を務めた菅谷氏のこと、慶長6（1601）年に入城した松平信一（1539～1624）以降の城主の変遷や、城郭整備の過程が記されています。

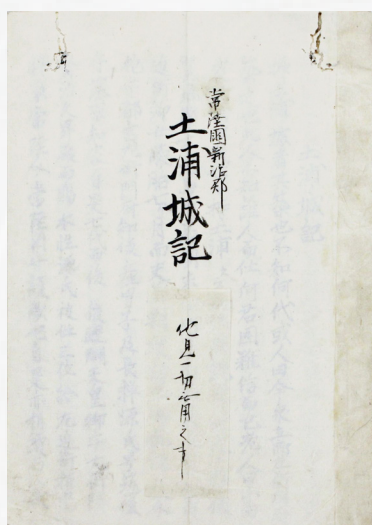
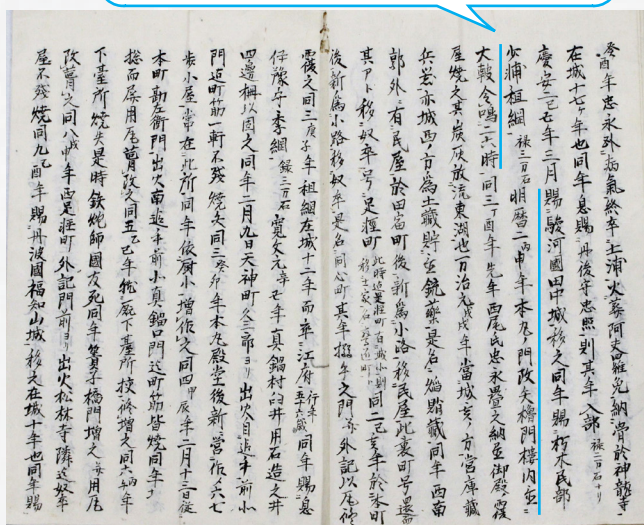
また、『土浦城記』には、瀧泉寺がたびたび城主のために祈禱を行ったことや、城主松平信興（1630～91）の慈悲深さを示す逸話が記されています。『土浦城記』執筆の背景には、歴代城主と瀧泉寺の関係の深さに加え、歴代城主の事績を後世に伝える意図があったと考えられます。

『土浦城記』は、江戸時代から近代まで人びとに読まれ続けており、複数の写本が残されています。近年、これらの写本の分析が行われた結果、『土浦城記』は書き継がれる中で次第に内容が変化していったことが明らかにされました。具体的には、信興に関する逸話が失われていく一方で、土浦城の来歴を知るための手引書として城に関する記述のみが書き写され、追記されるようになったのです。『土浦城記』は、人びとに読まれ、書き継がれていく過程で、祐鏡の意図とは異なる意味付けがなされたといえます。

土浦城の来歴のみならず、内容そのものの変化も楽しめる『土浦城記』の写本の数々は、11月23日（月）まで市立博物館で開催しているテーマ展『土浦城記』の世界―書き継がれ、失われた物語―にて展示しています。ぜひご覧ください。

市立博物館（029・824・2928）

明暦2年、本丸の門を改修して櫓門とした。  
櫓の中に太鼓を置き、昼夜に鳴らした。



▲土浦城記(個人所蔵)